

# いわゆる人口問題の位相（2）

## ——ゴドウィン・マルサス論争（i）

仲村政文

### 目次

#### ・ 論点開示

1. 人口問題は“アポリア”か
2. 人口変動の「転換」をめぐって
3. 人口政策におけるイデオロギー問題  
(以上 第71号)

#### ・ 人口問題へのアプローチ

——ゴドウィン・マルサス論争に寄せて

1. 時代の精神  
(以上 本号)
2. ゴドウィン批判と「人口の原理」
3. ゴドウィンの人間把握と「人口論」
4. マルサス人口論の基本的性格

#### ・ マルクスにおける人口論の展開構造

- ・ 「人的資源」論の射程
- ・ 人口変動の地域特性
- ・ 少子高齢化「問題」の歴史的位相  
——結びに代えて

## II. 人口問題へのアプローチ

——ゴドウィン・マルサス論争に寄せて

### 1. 時代の精神

「君の化学の書物をなげうちたまえ」とワーズワースはテンブルの学生である一青年に言った、「そして

ゴドウィンの必然についてを読みたまえ。」悲しい必然よ！致命的な悲運よ！しからは真理はそんなに変わりやすいのか。それは二十歳の時と四十歳の時とちがったものなのか。それは千七百九十三年には沸騰点にあり、千八百十四年には氷点下にあるのか。そんなことはない、人類と常識との名にかけて！ここ暫く立ち止まろうではないか。ゴドウィン氏は極端な意見をほしいままにし、当時のすべての最も猛烈で大胆な悟性を率いた。そしてそれはどうなったか。……才能あり、教育あり、主義主張ある、そんなに多くの若い者たちが、真理もなく、自然もなく、正直な感情のかけらもなく、理性のいささかのあられもその中にもっていないものによって、引きさらわれることがあり得たのか。新しい哲学（それはそう呼ばれた）は、ある瞬間には若々しい花嫁であり次の瞬間には萎びた老婆であるのか……<sup>1</sup>。

(1)

上の一文は、ウィリアム・ゴドウィン (William Godwin 1756-1836) と同時代の人であるウィリアム・ハズリット (William Hazlitt) の『時代の精神 (The Spirit of the Age, or Contemporary Portraits)』(1825) から引いたものである。この書は副題からも窺えるように、同時代の代表的な人々の人物像を描いたものであり、ゴドウィンやT.R.マルサスのほか、J.ベンサム、S.T.コールリッジ、G.G.バイロン、W.ワーズワース、W.スコットなど、24人を取り上げている。

ところで、ここに引いた一文は、1793年に刊

<sup>1</sup> W. Hazlitt, *The Spirit of the Age: or Contemporary Portraits* (2<sup>nd</sup> edition) S. and R. Bentley, 1825, p.31. 神吉三郎訳『時代の精神』日本評論社、1949、36ページ（旧漢字を新漢字に直した。以下同様）。

行されたゴドウィンの主著『政治的正義 (*An Enquiry concerning the Principles of Political Justice, and Its Influence on General Virtue and Happiness*)』に盛られた思想がどのように受容されたのか、そして、忽ちのうちに捨て去られたのかについて文学的に描出している。まず、詩人ワーズワース (1770-1850) のゴドウィンの思想への傾倒ぶりが窺える。そして、ワーズワースにかぎらず、当時の多くの若い知識人たちがゴドウィンの思想を熱狂的に支持したということがわかる。この書によって「自由と真理と正義とが話題になったところでは、何処においても彼の名は手近にあった」<sup>2</sup> のである。ところが20年後には、「萎びた老婆」となりはてたかのようなのである。だが、ハズリットは力を込めて、「そんなことはない、人類と常識との名にかけて！」という。

一体どういうことであろうか。このことを理解するひとつの手掛かりは、別の箇所における次のような叙述である。すなわち、「時代の精神が、この著作者に対するその扱いぶりにおけるほど遺憾なく示されたことは嘗て無かった——その逆襲と変化との愛、その偏見と、時の流行に対する臆病な屈従とが」<sup>3</sup> という叙述である。ここには当時の「時代の精神」の歴史的位相が端的に記述されている。さらに、コールリッジに関するハズリットの批評のなかに見い出される次の一節が刮目される。すなわち、「前世紀 [18世紀] の終末期に生まれたということは誰にもせよ才能ある人間にとって不幸なことであった。天才は正統派の道をふさいだ。

そしてそれ故にそれは除かれ、つぶされ、或は邪魔物としてどけられねばならなかった。王政の精神は時代の精神と仲たがいしていた。自由の炎、知性の光は、剣によって——あるいはその刃が剣よりも鋭い誹謗によって消されねばならなかった。……木の実や花——永遠の果実と不死の花とを摘みとる代りに彼らはまもなく自分たちが多くの偏見によって取り囲まれたばかりでなく、権力のすべての機関によって攻撃されるのを見出した」<sup>4</sup> と。

こうした政治的弾圧がおこなわれたのは、いうまでもなく、当時「革命の嵐」が吹き荒れていたからである。この政治的弾圧の象徴的事件としてあげることができるのは、ひとつには、トマス・ペイン (Thomas Paine 1737-1809) の『人間の権利 (*The Rights of Man*)』 (1791-92) に対する弾圧である。ペインはこの書において、エドモンド・パーク (Edmund Burke 1729-1797) の『フランス革命についての考察 (*Reflections on the Revolution in France*)』 (1790) は「フランス革命および自由の原理に対して加えられた言語道断な侮辱」<sup>5</sup> であるとして、これに反駁したのであるが、このことに対して当局は告訴し、販売を禁止したのである。もうひとつは、靴職人トマス・ハーディらが結成したロンドン通信協会——ここに拠る人々はゴドウィンの『政治的正義』を熱狂的に読んだといわれている——がピット政権の団結禁止法 (1799) によって弾圧されたという事件である。

このように、フランス革命がイギリス社会に及ぼした影響はきわめて大きく、特にイギリス

<sup>2</sup> *Ibid.*, p.29. 神吉訳, 34ページ。

<sup>3</sup> *Ibid.*, p.29. 神吉訳, 34ページ。

<sup>4</sup> *Ibid.*, p. 神吉訳, 74ページ。

<sup>5</sup> T. Paine, *The Rights of Man* (1791), Everyman's Library, 1915, p.4. 西川正身訳『人間の権利』岩波書店, 1971, 12ページ。

の支配層に与えた衝撃は強かったのである。いずれにせよ、このような情勢が、ゴドウィン（注）の著作（思想）に対する「扱いぶり」に多大の影響を与えたことは——ハズリットは黙示的にのべるにとどまっているのだが——容易に察しうるところである。実際のところ、フランス革命に対する反動と軌を一にして、いわゆるゴドウィニズムに対する反動も激しくなり、多くの友人たちが離反し敵対するにいたったのである<sup>6</sup>。因みに、ゴドウィニズムに対する反動の触媒となったのは、ひとつにはフランス革命におけるテロリズムであったのであるが、思想的にはパークの『フランス革命についての考察』——刊行年は『政治的正義』よりも古いのであるが——とともに、次節においてふれる、トマス・ロバート・マルサス（Thomas Robert Malthus）が匿名で上梓した『人口論』<sup>7</sup>（1798）にほかならなかったのである。

いずれにせよ、ここで「革命の嵐」というとき、この「革命」というまでもなく市民革命の謂である。しかしながら、われわれの主題にかかわる、18世紀末から19世紀の初頭にいたる時代における「時代の精神」を俎上にのせるとすれば、この市民革命のみでなく、産業革命を看過できない。改めて指摘するまでもなく、産業革命は新しい社会（近代社会＝資本主義社会）の物質的基礎を生み出し、市民革命の主目的的条件を形成したのである（ブルジョアジーの台頭と増大〔イギリスとフランスにおいて様相は異なるのだが〕）。したがって、われわれは市民革命と産業革命という「二重革命」に視点を据え

なければならない。この時代は、市民革命（フランス革命）と産業革命（イギリス）という二つの革命の勃発と内外への波及の時代にほかならないのである。付言すれば、戦争の時代でもあったのである。

もちろん、これらの革命には前史と呼ぶべき過程があるので、われわれは少しばかりスパンを広くとり、1750年代にまで遡及して視野に収めたい。そこで、この時代を通覧するために、1750年代から“1848年ヨーロッパ革命”（この年、K.マルクス/F.エンゲルス『共産党宣言』刊行）までの、本章の主題にかかわる主な事象・著作を掲出すれば（イギリスを中心に）、以下のようなようである。

- 1755 J.J.ルソー 『人間不平等起源論』刊行（『社会契約論』1762）
- 1764 [イギリス] ジェニー紡績機の発明  
以後、ジョン・ケイの飛び杼の発明（1733）など
- 1776 A.スミス 『諸国民の富』刊行  
アメリカ独立宣言  
T.ペイン 『モン・センス』（『人間の権利』（1791-92）
- 1789 フランス革命
- 1790 E.パーク 『フランス革命についての考察』刊行
- 1790 T.ハーディなどロンドン通信協会結成  
（1799 W.ピットの弾圧により解散）
- 1792 [イギリス] 対仏戦争開始  
[フランス] “9月大虐殺事件”
- 1793 [イギリス] フランスへ宣戦  
W.ゴドウィン 『政治的正義』刊行
- 1798 T.R.マルサス 『人口論』刊行
- 1800 R.オーエン、ニュー・ラナークの紡績工場にて社会改良の実験
- 1804 [フランス] ナポレオン法典公布
- 1805 W.ワーズワース 『序曲』刊行

<sup>6</sup> P. Sprague Allen, “The Reaction Against William Godwin,” *Modern Philology*, XVI, No.5 (September, 1918) ,pp. 57-58. 併せて、次の著作を参照のこと。E.E. Smith and E.G. Smith, *William Godwin*, Twayne Publishers, 1965, pp.52-53.

<sup>7</sup> 初版本の書名は次のとおりである。*An Essay on the Principle of Population, as it Affects the Future Improvement of Society, with Remarks on the Speculations of Mr. Godwin, M. Condorcet, and other Writers*, London, 1798.

- 1811 [イギリス] ラッドライト運動始まる  
 1820 P.B.シェリー『鎖を解かれたプロメテウス』  
 刊行  
 W.ゴドウィン『人口について』刊行  
 1830 [イギリス] マンチェスター・リヴァプール間  
 に鉄道開通  
 1832 [イギリス] 選挙法改正  
 1834 [イギリス] 改正救貧法(新救貧法)制定  
 1838 [イギリス] 人民憲章発表(チャーチスト運動)  
 1845 F.エンゲルス『イギリスにおける労働者階級  
 の状態』刊行

E.J. ホブズボームによれば、次に挙げる英語の言葉(単語)は、1789年から1848までの60年間に実質的に「発明」されるか、近代的な意味を獲得したものであるという<sup>8</sup>。

Industry, industrialist, factory, middle class, working class, capitalism, socialism, aristocracy, railway, liberal, conservative, nationality, scientist, engineer, proletariat, (economic) crisis, utilitarian, statistics, sociology, journalism, ideology, strike, pauperism.

こうした言葉(単語)からも窺えるように、この時代は政治、経済、社会、思想の分野にわたる大変革期であった。さらに刮目すべきは、この二重革命の時代における「芸術の異常な隆盛」<sup>9</sup>である。大変革期にあっては偉大な芸術が生み出されるということは、容易に理解しうることであるが、ここで看過できないのは、芸術作品を享受する新しい主体の登場である。すなわち、大規模な新しい「中流階級」という

享受主体(とくに文学の読者層)の登場である。このことによって、新しい“市場”が形成され、作家たちの自立化、専門化がすすんだ<sup>10</sup>。このことは芸術作品の商品化がすすんだことを意味した。

この時代はまた、よく知られているように、芸術の分野においてはロマン主義の時代としても特徴づけられる。ロマン主義の定義は、L.R. ファーストが掲出している「定義の行列」(ゲーテ、ハイネ、ルソーほかによる定義)にみるように、きわめて多様である<sup>11</sup>。この時代は革命と戦争の時代にふさわしく、人間と社会、自然との間の亀裂・矛盾が露わになり、このことが多くの芸術家たちの鋭敏な感性と想像力とを刺激せずにはおかなかったのである。そして、創作される作品には進歩的な方向性と反動的な方向性とが緋い合わさって表現されているのであるが、前期ロマン主義の特徴が、「陳腐な法則、うわべだけの気品、形式主義、秩序、限られた視野、人為性、因習、教訓癖、宮廷趣味、現状維持」などへの「嫌悪感」<sup>12</sup>でるとするならば、それはロマン主義の進歩的方向性を示すものであり、次にみるワーズワースやシェリーにおいても概ね妥当するものといえよう。

(2)

こうした点を念頭におきながら、ここではまず、冒頭に引いたハズリットの一文にあるワー

<sup>8</sup> E.J. Hobsbawm, *The Age of Revolution: Europe 1789-1848*, Abacus, 1978, p.13. 安川悦子・水田洋訳『市民革命と産業革命——二重革命の時代——』岩波書店, 1968, 3ページ。

<sup>9</sup> *Ibid.*, p.307. 安川・水田訳, 412ページ。

<sup>10</sup> R. Williams, *Culture and Society: 1780-1950*, Pelican Books, 1966, p. 50. 若松繁信・長谷川光昭訳『文化と社会』ミネルヴァ書房, 1973, 37ページ。

<sup>11</sup> L.R. ファースト(上島建吉訳)『ロマン主義』(Lilian R. Furst, *Romanticism*, 1970.) 研究社出版, 1971, 3-7ページ。

<sup>12</sup> 同前, 27ページ。

ズワースに刮目したい。ワーズワースはゴドウィンに傾倒したからというだけでなく、かれの天才は「時代の精神の純粋な流出である」<sup>13</sup>といわれるからである。ワーズワースはイギリスロマン主義の前期に属するが、同じくゴドウィンの影響を受けた、後期のロマン主義者シェリーにもふれたい。ふたりのロマン主義詩人のゴドウィンとのかかわりに簡潔にふれることにより、われわれの主題との関連において、「時代の精神」の一側面を剔抉したい。

ワーズワースは巷間においては、湖畔詩人・桂冠詩人として知られ、「ハイランドの乙女へ (To a Highland Girl)」「ひとり麦刈る乙女 (The Solitary Reaper)」「虹 (The Rainbow)」「水仙 (The Daffodils) などの詩が愛唱されている。しかしながら、われわれの文脈において肝要なのは、この時代の多くの芸術家のたちと同様に、ワーズワースもまた直接に、「社会的事件によって鼓吹され、それにまきこまれ」<sup>14</sup>、すぐれた社会詩（政治詩）を書いたということである。ワーズワースのばあい、その社会的事件とはフランス革命にほかならない。

ワーズワースの代表作のひとつであり、自伝ともいべき長詩『序曲 (The Prelude)』——「長編哲学詩」とも呼ばれるのだが——にあつては、人間と社会、自然に関するワーズワースの思想の形成と変容とが鮮やかに展開されている。全編8482行からなるこの長詩を読みすすん

でいくと、次のような一節がみいだされる。

その頃ヨーロッパは歓喜し、  
フランスはその黄金のときの頂上に立ち、  
そして、人間性は再び生まれ変わったごとく思われた。

……………  
…………… そしてそこにわれらは見た  
小さな町において、わずかの人々の中に  
いかに輝かしい顔があったか、ひとりの歓びが  
千万人の喜びであるその時に<sup>15</sup>。

この一節は、ワーズワースが1790年に友人とともに徒歩旅行をおこない、アルプスを越えてフランスに入ったときに遭遇した情景を描出したものである。フランス革命に沸き立つフランスの民衆の歓びの輪を共感の情をこめながら伸びやかに詠いあげている。ここで「その頃」といい、「黄金のときの頂上」というのは、ワーズワースは翌年の陰惨な大虐殺事件を念頭においているからであろう。

ワーズワースは1791年に再び渡仏する。これは『序曲』においては、フランス語の修得を目的とするものであったとされているが、フランス革命の実情にもう一度ふれたいという欲求に駆られての再訪ではないかと察せられる。ワーズワースは渡仏後、主なパンフレット類を「心をこめて」読み、諸所をぶらつき、つぶさに見聞する。そして、「……わが心はすべて / 民衆に与えられ、わが愛は彼らのものとなった (…… my heart was all / Given to the People, and my love was theirs)」<sup>16</sup> というように、民衆（人民）と

<sup>13</sup> W. Hazlitt, *The Spirit of the Age*, *op.cit.*, p.189. 神吉訳, 168ページ。

<sup>14</sup> E.J. Hobsbawm, *The Age of Revolution*, *op.cit.*, p.310. 安川・水田訳, 417ページ。ホブズボームはその例として、モーツァルト、ベートーヴェン、ゲーテ、ディケンズなどを挙げているが、ワーズワースも見落としてはならないことは、以下にみるとおりである。

<sup>15</sup> W. Wordsworth, *The Prelude, or Growth of A Poet's Mind* (Text of 1805), 352-360. 野坂穰訳『プレリュード 序曲』, 中央公論事業出版, 1969, 281ページ。ローマ数字は巻ナンバーを、算用数字は行ナンバーを示す (以下, 同じ)。

<sup>16</sup> *The Prelude*, 124-125. 野坂訳, 100ページ。“people”の訳語については微妙な問題を含むが、ここでは「大衆」を「民衆」に改めて引用した。

の一体感を味わう。前年の渡仏のときは一旅行者（傍観者）として偶然にフランス革命の一端にふれるにすぎなかったのであるが、今回は目的意識的にフランス革命について探究したうえで、革命の精神を全的に受容したようだ。

フランス革命を積極的に支持したイギリスのロマン主義者のなかでも、フランス革命に直にふれたのはただひとりワーズワースのみであり、それ故に彼は、「芸術家と民衆，芸術と生活，個人と集団の間の問題」を体験することができた<sup>17</sup>といえるのではないか。いずれにせよ、ワーズワースがこのように、歓呼の声を上げてフランス革命を支持するという成り行きについては、次のようなワーズワースの来歴（体験や環境）が刮目される。ワーズワースは少年時代を振り返り、次のように詠んでいる。

貧困の地に生まれ、そこには  
なお昔の多くの素朴さと  
正しい作法や打ちとけた簡素さが  
英国の他の辺境よりも多く残されていたから  
それは私の運命であった、わが学校時代の  
全行路を通じて、かつて一度も  
人々の顔に、少年にも成人にもおしなべて  
富や家柄にたいしての特別な  
注意とか尊敬のしるしを見ることはなかった<sup>18</sup>。

ここでは少年時代に体験した平等な人間関係が回顧されている。さらに、ワーズワースがここで学んだケンブリッジ大学は、すべての者が「平等の基盤」に立ち、名誉において皆平等であるという「ひとつの共同体」であったという。こうした来歴のなかで形成された思想と「道徳的感情」とがフランス革命の「精神」を受容す

る「原因」となったと、ワーズワースは述懐している。つまり、フランス革命を受容する素地（資質）がすでにワーズワースのなかにあったのである。したがって、ワーズワースに内在する価値（思想）がフランス革命の「精神」と共振したということもできよう。しかしながら、1792年の“9月大虐殺事件”の翌月パリに入ったワーズワースは、その悲惨さに衝撃を受け、革命に「失望」する。

以上われわれは、若きワーズワースのフランス革命への共鳴についてふれたのであるが、もうひとつ刮目すべきは、ワーズワースのゴドウィンの思想への傾倒という問題である。ゴドウィンの理論と思想そのものも、フランス革命の影響を受けている——そして、この革命を支持する立場は終生変わることはなかった——のであるが、そのゴドウィンへのワーズワースの傾倒ぶりは本節冒頭に引いたハズリットの一文にみるとおりである。

ワーズワースはゴドウィンの『政治的正義』が刊行された直後から、ゴドウィンやそのサークルと交流しており、『序曲』においても、「一方／初めから粗野な理論（wild theories）が流布されて／その巧妙さには少なくとも／私はただ軽く耳をかしたが、今／このことを確かめた、即ちやがて時はすべての事物を正しくし、照明するだろう／……」<sup>19</sup>（下線は引用者）と詠んでいる。「軽く耳をかした」というのは、先のハズリットの描写とは異なるが、このようにゴドウィンへの関心の度合いを小さく言い表すのも、フランス革命に「失望」するという失意のなか

<sup>17</sup> V.G. Kierman, “Wordsworth and the People”, in *Democracy and the Labour Movement: Essays in Honour of Dona Torr*, E edited by John Saville, Lawrence & Wishart, 1954, p.240.

<sup>18</sup> *The Prelude*, 217-225. 野坂訳, , 107-108ページ。

<sup>19</sup> *Ibid*, 775-778. 野坂訳, , 220ページ。

で書いたからであろう。いずれにせよ、ここではさしあたり、ワーズワースのゴドウィンの「理論」（『政治的正義』）との交渉を確認しておきたい。われわれの文脈において重要なことは、ゴドウィンの「理論」（哲学）をワーズワースはどのように咀嚼し学んだのかということである。この点については、次の一節が参照されるべきである。

この時、すべてのことが速やかに悪化をたどりつつあった。人間の望みとその感情より抽出することを約束した哲学は、その時より後は直ちに受け容れられる、より純粋な要素に永久に固定されるべきであった。それは熱心家にとりては入りて心を活気づける、心引かる領域であった。そこにおいては熱情は働く特権を持ち、彼ら自身の名前の音を決して聞くことは無かった。しかし、今少し思いやりもて語るなら、その夢は若き率直な極端を喜び心にとりては魅力あり、また人間の裸にされた理性自身を熱情の目標とするものにも少なからず心引くものがあった。何と云う喜び、いかに栄光ぞ、己が知識とルールにおいて世のすべてのもろさ、たよりなさを眺めそして断固たる統御もて過去の弱きものを形造りたる自然と時と場所の偶然事を払い去りて、社会の自由をその唯一の基盤なる、個々の心の自由の上に築く、この個々の心は、一般の法律の盲目的の抑制に対して優位にありて、主人に適わしく一つの指標を選ぶ、それはあらゆる情況において独立の知恵の上にひらめきたる光なり<sup>20</sup>。

ここではゴドウィンの名前は伏せられているが、ワーズワースが理解するゴドウィンの思想が開陳されているとみてよい。こうした理論は、

しかしながら、フランス革命におけるテロリズム（大虐殺や恐怖政治）に「失望」したワーズワースにとって、色褪せたものとなった。真摯に思索を重ねたワーズワースは、「……遂にノ病的になり」、「矛盾」に疲れ果てることになる<sup>21</sup>。「この時、すべてのことが速やかに悪化をたどりつつあった」<sup>22</sup>とあるように、フランス革命への「失望」がゴドウィンの「理論」への疑念を生み出したといえる。だが、このことはゴドウィンの「理論」からの訣別——ワーズワース研究者の多くがこのように主張するのであるが——を決して意味するものではない。フランス革命をゴドウィンの「理論」と直結して考えるワーズワースは、フランス革命におけるテロリズムを前にして混乱し確信をなくしたのであって、それ以上のものではない。その証左は、『序曲』における、次のような述懐である。「……わが友よ。ノその時私が何を学び、或は学んだと思うかを、真理について、ノまた現前の事物によりて裏切られ投げ込まれた誤りについて。ノ……ノある時は信じ、ノある時は不信を抱きながら、涯しなく困惑してノ衝動と、動機、正と不正、道徳的ノ責務の根拠、何が法則でノ何が是認かに迷い。果ては証拠を求めてノしかもそれをすべてのものに探り、私はノすべての確信を失った。」<sup>23</sup>

また、次の事実にも刮目したい。ワーズワースは親友であるウィリアム・マッシュウズ宛の手紙において、『政治的正義』の第二版（1796刊）の序文の「野蛮な書き方（barbarous writing）」を批判しているが<sup>24</sup>、『政治的正義』の内容に

<sup>20</sup> *Ibid.*, 806-830. 野坂訳, , 223-224ページ。

<sup>21</sup> *Ibid.*, 893-901. 野坂訳, , 229ページ。

<sup>22</sup> *Ibid.*, 806-807. 野坂訳, , 222ページ。

<sup>23</sup> *Ibid.*, 880-889. 野坂訳, , 228-229ページ。

<sup>24</sup> *The Early Letters of William and Dorothy Wordsworth (1787-1805)*, Arranged and Edited by Ernest De Selincout, Oxford: Clarendon Predd, 1935, p.156.

については批判していない。ワーズワースは1811年の時点においても、ゴドウィン宛の手紙<sup>25</sup>にみるように、彼と交流しているのである。

総じていえることは、ワーズワースはフランスの女性との恋愛の経験などから、感情を伴わない理性の力や人間の完成可能性 (perfectibility) [後述] について疑問をもちつつも、ゴドウィンの「社会的人道主義 (social humanitarianism)」については信頼していたのである<sup>26</sup>。こうした立場は終生変わらなかったといわなければならない。ワーズワースは保守化したといわれる晩年にあっても、“Humanity” (1835) を書き、「諸国民の富 (‘the Wealth of Nations’)」——明らかに、アダム・スミスの書を指示しているのだが——を俎上にのせて、現実の過酷な労働と貧困を告発しつつ、最もみずぼらしい花のもつ品位を決して冒してはならないことを詠いあげているのである<sup>27</sup>。

フランス革命への「失望」についても留保が必要である。ワーズワースは革命におけるテロリズムに対する嫌悪の情からこの革命を批判しているのであって、革命に内在する理念そのものには異議を唱えていない。このことは、W. マッシュウズ宛の別の手紙のなかで、フランス革命の悲惨な情況にふれながら開陳している言説からも窺うことができる。その要点は、次のようである<sup>28</sup>。暴力的な「革命」は避けられるべ

きであり、「政治的正義のルール」によって恐怖をなくし、「静かなる自由」をもたすことができる、と。したがって、ワーズワースは出版の自由を最重要視し、熱情的なアジテーションを排斥する。こうして、ワーズワースはロベスピエールの失脚 (処刑) を大いに喜び、人民 (the People) とその「道徳」に信頼を寄せるのである。

(3)

以上われわれの主題にかかわって、ワーズワースへのゴドウィンの影響について簡潔にみてきたが、次に、ワーズワースとの比較において、イギリスロマン主義の後期に属する P.B. シェリー (Percy Bysshe Shelley 1792-1822) についてみることにする。

まず、直截にゴドウィンを讃えた詩 (1817) を掲出して筆をすすめるとしよう。

Mighty Eagle

Mighty eagle! Thou that soarest  
O'er the misty mountain forest,  
And amid the light of morning  
Like a cloud of glory hiest  
And when night descends defiest  
The embattled tempest's warning!<sup>29</sup>

<sup>25</sup> C. Kegan Paul, *William Godwin: His Friend and Contemporaries*, New York: Ams Press, Vol. ,1970, pp.218-220.

<sup>26</sup> E.E. Smith/E.G.Smith, *William Godwin, op.cit.*, p.120.

<sup>27</sup> *Wordsworth: Poetical Works*, With Introductions and Notes, Edited by Thomas Hutchinson, A new Edition, Revised by E.D. Selincourt, Oxford University Press, 1967, pp.392-393. また、『序曲』においても、「諸国民の富 (Wealth of nations)」という言葉がみいだされる。「近代の統計の書と、それによりて考え出された、われらが『諸国民の富』となづけるものの / 全き空虚——そこにのみ富はあり、……」とのべ、「現代において、肉体労働によりて / 生活する人々の中に、…… / そしてその労働は、社会の構成によりて / われらが自己自身の上に課するかの不公正 / のすべての重圧の許に、その適当な比重を遥かに越えている。」(*The Prelude*, XII 77-105. 野坂訳, , 281-283ページ。) なお、「国民の富」は「諸国民の富」に改めた。

<sup>28</sup> *The Early Letters of William and Dorothy Wordsworth (1787-1805)*, *op.cit.*, pp. 119-121.

<sup>29</sup> *Shelley: Poetical Works*, Edited by T. Hutchinson, Oxford University Press, 1968, pp. 541-542.



この詩においてゴドウィンは、天翔る「巨大なワシ (mighty eagle)」に例えられている。飛翔する「巨大なワシ」によってゴドウィンの思想の大きさとその影響の広さが言い表されるとともに、これを仰ぎ見るシェリーの姿が暗示されている。シェリーはゴドウィン宛の最初の手紙<sup>30</sup>において、尊敬と敬服の念を表明しているが、この短詩は、その後シェリーがゴドウィンの思想にますます傾倒したことを示唆している。

シェリーがゴドウィンの『政治的正義』を読んだのは、同じ手紙のなかで2年ほど前と記されているので、1809年頃と推定されるが、このときワーズワースは既に、前述のように、フランス革命への「失望」からゴドウィンの思想に疑念を抱いていたのである。このことはワーズワースに限らず、S.T. コレッジやR. サウジなどのロマン主義者も同様であるのだが、こうした動向が前述の“ゴドニズムに対する反動”とかかわっているのかどうかという点については詳らかでない。

シェリーはゴドウィンといわば思想上の「師弟関係」をむすぶだけでなく、私的にも深い関係をもった（ゴドウィンの娘メアリーとの結婚、ゴドウィンに対する金銭的な支援など）。そして、シェリーへのゴドウィンの影響は、30年という短い生涯ではあったが、終生衰えることはなかった。

では一体、ゴドウィンの革命的精神はシェリーの詩作においてどのように表出したのであろうか。以下われわれは、シェリーの詩劇『鎖を解

かれたプロメテウス (*Prometheus unbound*)』(1820) を、われわれの文脈において、読み解いていくとしよう（訳者および土居光知の注釈<sup>31</sup>を参照した）。

なお、予め指摘しておけば、この詩劇は比喩的に、「ゴドウィンの作品のなかの最高のもの」<sup>32</sup>と評されるほどに、ゴドウィンの思想に彩られている。この点については、序文における次の叙述が参照されるべきである。シェリーはのべる。「われわれの時代の偉大な作家たちは、われわれの社会条件や、それを固め合せている諸々の見解の、想像もつかぬ変革の友であり、先駆者なのだ。われわれにはそう思う理由がある。精神の雲は集積した稲妻を放射しようとしている。そして、制度と見解の均衡は、今回復しつつある。否、まさに回復されようとしているのだ」<sup>33</sup>と。この一文は、ミルトンを振り返りながら述べられたものであるが、ここで「偉大な作家たち」というとき、そのひとりにゴドウィンも数え上げられているとみてよい。

この『鎖を解かれたプロメテウス』はアイスキュロスの『鎖に縛られたプロメテウス』を改変し、新しく構成した叙情詩劇であり、その序文においてのべられているように、プロメテウスの人物像やドラマの展開の仕方、その結末などは大きく異なっている。改めて紹介するまでもないのであるが、この詩劇は次のように展開する。巨人プロメテウスはジュピターの火を盗んで人類に与えたため、ジュピターの怒りをかい、コーカサス山中の岩に縛られるが、デモゴ

<sup>30</sup> Shelley's Letter to W. Godwin, January 10, 1812.

<sup>31</sup> *Prometheus Unbound*, by Percy Bysshe Shelley, with Introduction and Notes by Kôchi Doi, Kenkyusha, 1931.

<sup>32</sup> H.N. Brailsford, *Shelley, Godwin and Their Circle*, Second Edition, Oxford University Press, 1951, p.125.

<sup>33</sup> P.B. Shelley, *Prometheus Unbound: A Lyrical Drama*, in *Shelley: Political Works, op.cit.*, p. 206. 石川重俊訳『鎖を解かれたプロメテウス』岩波文庫, 2003, 17-18ページ。

ルゴン（後述）によってジュピターは没落し、プロメテウスは解き放たれ、愛と喜びに満ちた、自由で美しい新世界が訪れる（始まる）。この『鎖を解かれたプロメテウス』は、「抒情詩劇」と銘打った革命劇にほかならないのである。

われわれの文脈にかかわって、先ずもって刮目したいのは、フランス革命の扱ひである。この革命の複雑な展開は18世紀末から19世紀はじめにおいて、前述のように、革命的な芸術家や知識人にとってはいわば「躓きの石」であったのであるが、シェリーはこれをどのように詠んでいるのであろうか。まず、次の一節を掲出しよう。

セミコーラス（一）

血の苦しみが滴り流れる。  
あの一の蒼白い、痙攣する額から。  
少しなりと痛みをやわらげさせたまえ。  
見よ、幻滅の国民が  
荒廃から日のように立ち上がる、——  
その国は真理に献げられ、  
自由は真理を友として導く、——  
団結した同朋の無数の群れ、  
愛は彼らを子らと呼ぶ——<sup>34</sup>

さらに続けて、「セミコーラス（二）これは、別のものの子らだ—— / 見よ、血族が殺しあう。 / 死と罪の刈り入れだ、—— / 血は新しき葡萄酒のように泡立つ、—— / そして、ついに失望が、 / あがき苦しむ世界の息の根を止め、屈従するものらと暴君が勝つ。」<sup>35</sup>と詠う。

ここには、革命における暴力を否定するシェリーの見地が鮮明に描出されている。フランス革命におけるテロリズム（“大虐殺”，恐怖政治

など）——明示的ではないのだが——の悲惨さとその否定的な影響（「幻滅」「失望」「暴君の勝利」など）が詠われるとともに、刮目すべきは、自由の旗幟を掲げて「立ち上がる」国民が描かれていることである。ここではフランス革命は複眼で捉えられており、フランス革命に幻滅するワーズワースらとの分水線もここにあるといえよう。また、この詩劇におけるキーワードのひとつである「愛」という言葉がここにも顔をしていることも看過できない。さらにシェリーはもう一度、より広い視野から、＜プロメテウス＞の口を借りて次のように詠んでいる。

プロメテウス

悲しいものを二つ——

語るも、見るも、——ひとつの方は許してもらいたい。

いろいろな題目、人間の本性の神聖な標語——それは、輝かしい賛歌として高らかに掲げられた。国々は、そのまわりに群がり、絶叫した、声を合わせ、真理だ、自由だ、友愛だ、と。突如、恐ろしい混乱が天から落ちてきた、国々に。闘争と策略と恐怖が起こった、——暴君らは乱入し、略奪品を分けた。これが、わが目に見た真実を映す影だ。<sup>36</sup>

ここにいうふたつの「悲しいもの」とはキリストの磔刑とフランス革命とを指すとする説<sup>37</sup>が有力であるが、「国々は、そのまわりに群がり、絶叫した」とあるように、シェリーはこのフランス革命についてグローバルな視点から描出しているという点について刮目すべきである。一方において「神聖な標語」が掲げられるが、他方においてテロリズムがあり、さらに革命への国際的な反動が展開し、戦争が頻発した。こ

<sup>34</sup> *Ibid.*, Act , Lines 564-572. 石川訳, 78ページ。

<sup>35</sup> *Ibid.*, Act , Lines 563-577. 石川訳, 78-79ページ。

<sup>36</sup> *Ibid.*, Act , Lines 647-655. 石川訳, 86ページ。

<sup>37</sup> *Prometheus Unbound*, by Percy Bysshe Shelley (by Kôchi Doi), *op.cit.*, p.133.

うした紛れもない「真実」——フランス革命そのものに限定されない——をシェリーは「悲しいもの」としたのであり、これを前にしてプロメテウスは苦悩するのである、——このように解したい。もちろん、この苦悩はシェリー自身の苦悩にほかならないのであるが、これは一体、どのように解決されるのであろうか。

シェリーは、この詩劇において<デモゴルゴン>とともに大きな役割を演じる<大地>に、次のように語らせる。「大地 あなたの苦しみ分かる、わが子よ、——その複雑な喜び、/ 悲哀と正義感が入り混じったその気持ち。その心境を鼓舞しようと、/ 不思議な、妙に美しい精たちに昇ってくるように命じた。/ その住むところは、/ 人類の思想 (human thought) のほの暗い洞穴、/ 鳥たちが風に乗って飛ぶようにして、/ 世界をとりまく思想のエーテルの中にいる、——彼らは見る、/ 鏡の中を見るように、かのおぼろなる国のかなたに、/ 未来を。彼らが、慰めの言葉をあなたに言ってくれるように。」<sup>38</sup>（下線は引用者）

シェリーはここに<精 (spirit)>を登場させて、「複雑な喜び」と「悲哀と正義感が入り混じった気持ち」を抱くプロメテウスに対して、「慰めの言葉」を聞くために、「未来」をみるように告げる。そしてまた、「人類の思想 (human thought)」にも目を向けよと暗示しているようだ。このことによって、現在の「気持ち」に方向性が与えられるということである。因みに、ここでいう「人類の思想」は、ゴドウィン(Godwin)の思想を指示しているとみるのは穿ちすぎであろう

か。さらに、<精 (spirit)>はゴドウィンの使者であるとみるのは的外れであろうか。そのようにみることができるとすれば、ゴドウィンの思想の普遍性がここに提示されているということもできよう。

いずれにせよ、「人類の思想」を学び、「未来」をみる、あるいは「未来」を語るという立場は、ワーズワースの『序曲』にはみられない、シェリー固有のものであり、これもまたゴドウィンに負うところが大きいといえよう。シェリーはこうした見地から『鎖を解かれプロメテウス』を書き、ジュピターの没落（暴虐な権力の崩壊）を平和革命の成就として——フランス革命の展開（暴力革命）とは異なる形において——高度な歴史意識に支えられながら、詠いあげたのである。したがって、この詩劇はフランス革命における暴力性を否定しつつも、直ぐ後にみるように、その理念を継承しているのである。

ここにいう「未来」に関連して、われわれが想起するのは、シェリーの次の一文である。「詩人とは、現在をあるがままに真率にながめ、現在の事物のよって立つ法則を発見するばかりでなく、現在のなかに未来をながめ、しかも、彼の思想は、後世に花や実となる萌芽でもある……。詩人は、永遠なるもの、無限なるもの、全一なるものに与る。」<sup>39</sup>

シェリーはこうして、苦悩の先へと歩をすすめ、ひとつの「必然」としての新しい社会の出現——ジュピターの没落とプロメテウスの開放——を描き出す。

<sup>38</sup> *Prometheus Unbound*, Act 1, Lines 656–663. 石川訳, 87ページ。

<sup>39</sup> P.B. Shelley, “A Defence of Poetry”, in *The Complete Works of Percy Bysshe Shelley*, Newly Edited by R. Ingpen and W.E. Peck, Vol. 1, Gordian Press, 1965, p. 112. 上田和夫訳「詩の擁護」（同訳『シェリー詩集』新潮文庫, 2007, 所収）253–254ページ。

時間の精

王座、祭壇、法廷、牢獄、——その中や  
その傍らで、惨めなものたちがその手で運んだ  
笏や、三重の冠、剣や鎖や巻物、  
無知のものらが注釈し、理屈で固めた不正な巻物

それはみな、あの怪奇で野蛮な形のようなものとなり、  
もはや誰にも覚えられていない幽霊のようなものになった、  
(中略)

人類は  
笏もなく、自由で、制限もない——だが、人類は

平等となり、階級なく、人類のへだて、国々の別なく、  
畏怖、礼拝、身分の別けへだてが取り除かれ、王者として  
自らを治め、——正しく、優しく、賢くなっている——だが、人類に——  
煩惱はなくなったのか。……………  
偶然、死、無常からのがれることはない、<sup>40</sup>  
(以下、略)

みられるとおり、旧い体制の崩壊と、自由、平等(階級の廃絶、国家間の平等)と人民主権などが実現した新しい体制の成立が詠われている(もちろん、「死」や「無常」などは残るのだが)。ここで看過してはならないのは、新しい社会へ到達する主体は「人類」とされていることである。ここでは、新しい社会は「人類の思想」を体現した社会にほかないのである。

この「人類」はシェリーにおいて、どのように措定されているのであろうか。シェリーは、この詩劇において大きな役割を演じる<大地>に次のように語らせている。「大地 人類(Man)だ、おお、人々(Men)ではない。思想の連鎖が、ノ分かち得ない愛と力の連鎖が、金剛石の力をもって諸元素を制圧する、(3行 略)人類だ、多くの魂が調和した一つの魂、ノその

本質は、それ自らの崇高な制御の力、……」<sup>41</sup>

ここにもゴドウィンの影響を読み取ることができるのであるが、いずれにせよ、分散的な諸個人の集合ではない人類(Man)、つまり、「力」と「愛」を結合し、ひとつの「魂」にまで高められた人類がここに誕生するのである。シェリーによれば、ここにいる「力」(意志の力)は「愛」によって舵取りされるのである。こうして実現される新しい社会について、この詩劇の舞台回しともいうべき<デモゴルゴン>——ゴドウィンの思想を体現していると看做される人物——は、この詩劇を次のように締めくくる。

デモゴルゴン

この日こそ、空しい、深い淵の下へと、  
大地より生まれしものの力により、「天」の独裁を  
呑み込んでしまう日、  
「征服者」が虜となして曳かれて行くその日、——  
愛が、賢き心のうちの堅忍の力の、おごそかな王座から、  
また恐ろしき試練のめくるめく究極から、  
危うく、険しく、  
瓦礫の如き、苦悩の狭き縁から湧き出でて、  
その癒しの翼を世界に広げ、包む日なのだ。

「優和」「高德」「叡智」「堅忍」、  
これこそが、最も堅固な保証の印、  
「破壊」の力のわなの穴をふさぐものなのだ、——  
また、もし力弱き「永遠」が、  
諸々の活動と時間の母なる永遠が、あの蛇をはな  
してしまい、  
それが、全身で巻きつくようなことがあっても、  
これらの保証の力によってこそ、  
その「運命」は解きほぐされ、再び主権を手に治めるのだ。

終わることなしと「希望」が思う悲哀を偲ぶ、——  
死や夜よりも暗い悪を赦す、——  
全能に見える「力」を恐れぬ、——  
愛し、そして耐える、——「希望」が  
自らの残骸から、静思するものを創り出すまで望む、——

<sup>40</sup> *Prometheus Unbound*, Act , Scene iv, lines 164-204. 石川訳, 205-207ページ。

<sup>41</sup> *Ibid.*, Act Lines 394-401. 石川訳, 243ページ。

決して変わらず、たじろがず、悔やまない——  
これこそが、あなたの栄光のように、タイタンよ、  
善であり、偉大であり、喜ばしく、美しく、自由  
であるということだ、——  
これのみが「命」であり、「喜び」であり、  
「支配」であり、「勝利」なのだ<sup>12</sup>。

ここには、先に描かれた階級なき自由で平等な社会の姿が別の視点から伸びやかに描かれている。シェリーによれば、こうした社会は意志の力に支えられた「愛」と「希望」がもたらしたものであるが、これは不屈の精神、愛と忍耐によってジュピターの暴圧から開放されたプロメテウスの希求する社会であり、われわれはここに、シェリーの希求する“ユートピア”をみいだすことができるのではなからうか。また S. スペンダーのいう革命的楽観主義者としてのシェリー<sup>13</sup>がここにみいだされるということもできよう。

このユートピア思想もまた「時代の精神」の発露である。少しばかり注釈を加えるとすれば、この『鎖を解かれたプロメテウス』におけるキーワードのひとつである「愛」は、例のフランス革命のテロリズム（および、当時の戦争など）にたいするアンチ・テーゼとして措定されたものとみなすことができよう。そしてこのことは、シェリーの「師」であるゴドウィンフランス革命に対するひとつの評価と連なっているのである。ゴドウィンはのべる。「フランス人の共和主義の原理が幼稚であったとき、革新の友の語調はあまりにも傲慢であった。……彼らの厳しさのなかには、いささか野蛮めいたところが

あった。私達の敵が野蛮だということは、この弁解にはならない。平等と独立の精神といえども、闘わねばならぬ敵のおかしたエラーによって、自らの陥っている偏見から目をそらすようなことがあってはならない<sup>14</sup>と。ゴドウィンはこのように、フランス革命を冷静に凝視している。そして、これを最後まで支持するのであるが、シェリーはゴドウィンと同じ地平において、「野蛮」を排し、「愛」（および「希望」）という普遍的な価値を措定するのである。

シェリーのいう「愛」について少しばかり補足するとすれば、次の一文が参照されるべきである。「道德の大いなる秘密は愛である。すなわち、自分自身の本性から抜け出して、自分のものでない思想、行為、人格のうちに存在する美しいものと、自分を一体化することである。……相手の、または他の多くの人々の立場に、わが身をおかねばならない。同胞の苦痛も喜びも、自分のものとしなければならない。」<sup>15</sup>みられるとおり、ここにいう「愛」は思弁的な言説とはまったく無縁である。詩劇『鎖を解かれたプロメテウス』にあっても、「愛」という言葉が頻出するが、それらは詩固有の暗喩や隠喩に彩られているとはいえ、決して思弁的に創りだされたものではない。ワーズワースにあっては、詩は「人間性を守る巖」であり、「親しい関係と愛（relationship and love）を身に帯びて、人間性（human nature）を鼓舞し保護する」ものにほかならない<sup>16</sup>のであるが、シェリーの詩劇も

<sup>12</sup> *Ibid.*, Act 1, Lines 554-578. 石川訳, 258-259ページ。

<sup>13</sup> S. スペンダー 『Shelley』 (S. Spender, *Shelley*, 1952) 森清訳, 研究社, 1956, 35ページ。

<sup>14</sup> W. Godwin, *The Enquirer: Reflections on Education, Manners and Literature* [1797], Reprint of Economic Classics, Augustus M. Kelley, 1965, p. iv. 片岡徳雄ほか訳 『探求者』 黎明書房, 1977, 3ページ。

<sup>15</sup> P.B. Shelley, "A Defence of Poetry", *op.cit.*, p. 118. 上田訳, 263ページ。

<sup>16</sup> W. Wordsworth and S.T. Coleridge, *Lyrical Ballads: Preface*, in *Wordsworth: Poetical Works, op.cit.*, p. 738. 宮下忠二訳「一八〇二年版（第三版）序文」（『抒情歌謡集』 大修館書店, 1984, 所収）256ページ。この詩集（バラード）の「序文」はワーズワース筆である。

そのようなものとして展開しているといえよう。

こうした言説のなかに、ふたりの詩人自身の人間性を垣間見ることができるが、改めて、これを歴史的文脈においてみる必要がある。

R. ウィリアムズによれば、「一般的な共通の人間性 (a general common humanity) を強調することは、新しい種類の社会が、人間をたんなる生産の特殊な用具と考えるようになりつつあった時代には、明らかに必要であった。愛と親しい関係 (love and relationship) を強調することは、直接の苦しみの中に必要であるばかりでなく、攻撃的个人主義にたいしても、また新しい経済的諸関係にたいしても必要であった。」<sup>47</sup>

ここにいう「新しい種類の社会」とはいうまでもなく、いわゆる近代社会 (資本主義社会) にほかならない。ウィリアムズの言説をより正確に経済学の用語によって換言すれば、「一般的な人間性」「愛」「親しい関係」が強調されるのも、市場と労働過程における対立と疎外、資本主義的生産関係 (階級関係) における対立と疎外という関係性が——古い共同体の紐帯から解き放たれた諸個人の孤立と対立、階級対立という新たな関係性——が成立するからである (ワーズワースの表現を借りて概括していえば、「社会が人と人を分かち」<sup>48</sup> のである)。経済活動の動力としての「利己心」を高く掲げ、“みえざる手”を導出した彼のアダム・スミスが“同感 (sympathy)”なるものに関心を寄せるのも、少しばかり次元を異にするが、こうした文脈において理解することができのではないか。スミスの見地は少なくとも、「……相手の、ま

たは他の多くの人々の立場に、わが身をおかねばならない。同胞の苦痛も喜びも、自分のものとしなければならない」(前出)というシェリーの言説と接続しているといえよう。

こうしてみると、シェリーの掲げる「愛」は、フランス革命におけるテロリズムへの批判としてのみでなく、近代社会における諸個人 (および階級) の亀裂・対立という関係性をどのように止揚するかという文脈に位置づけられよう。かかる関係性の止揚への希求はシェリーに限らず、ロマン主義者に通底するものであるが、その方向は中世社会 (あるいは古代社会) や自然であるのか、それとも「未来」(新しい社会) であるのかという点において分岐する。ワーズワースは前者の方向をたどり、「自然の霊 (soul of Nature)」を賛美するなど<sup>49</sup>、幼年・少年時代に親しんだ自然のなかへと回帰する。これに対して、シェリーの希求はきわめてラディカル——それは“ユートピア”にほかならないとしても——である (シェリーのラディカルな立場はオックスフォード大学在学中にまで遡ることができる。シェリーは友人とともに『無神論の必要 (The Necessity of Atheism)』<sup>50</sup> [1811] を出版して大学から放校処分を受けているのである)。

いずれにせよ、このような違いが生じるのも、ひとつには、民衆 (people) の把握の仕方が異なるからである。イギリスのマルクス主義者の強調するところによれば、ロマン主義者が初めて民衆を「歴史の主体」として捉えたという<sup>50</sup>。しかしながら、その捉え方は一様ではない。例

<sup>47</sup> W. Williams, *Culture and Society*, op.cit. p.59. 若松・長谷川訳, 45ページ。なお、「全面的な」は「一般的な」に、「愛情」は「愛」に改めた。

<sup>48</sup> *The Prelude*, XII 215, 野坂訳, , 291ページ。

<sup>49</sup> *Ibid.*, XI 138, 野坂訳, , 253ページ。

<sup>50</sup> 水田洋「ロマン主義の位置づけのために」『展望』第1号, 1956, 8ページ。

えば、ワーズワースのばあい、パリやロンドンにおいて多くの民衆と出会っているにもかかわらず、主に生誕地の湖水地方などの小農民たちとその労働に眼差しを注いだのである。もちろん、『序曲』にみるように、純真なヒューマニストというべきワーズワースは、都市の貧しき人々にも暖かい同情の念を寄せている。一方シェリーは、次のような詩を詠む。

イングランドの人々へ

イングランドの人びとよ なぜ君たちは  
君たちをはずかしめる貴族たちのために耕すのか  
なぜ 君たちの暴君どもが身につける  
ぜいたくな衣装を あくせくと織るのか

なぜ君たちは 揺りかごから墓場まで  
君たちの汗をしばりとろうとする——いや  
君たちの血を吸う あの恩知らずの  
のらくらどもを 食わせ 着せ かばうのか  
(以下3連 略)

種子をまけ——だが、暴君に刈らせるな  
富を捜し出せ——だが、べてん師の手にわたすな  
服を織れ——だが、のらくらどもに着せるな  
武器を鍛えろ——自分たちを守るためなら<sup>51</sup>  
(以下2連 略)

ここには単なる民衆 (people) ではなく、搾取と支配に抗する人民 (people) としての農民と労働者が登場している。シェリーは同じ年に“ソネット 1819年のイングランド (Sonnet: England in 1819)”を書いて、国王、軍隊、法律、宗教、議会などの上部構造をラディカルに批判しているが、上掲の詩にあっては、ブルジョ

ア的な自由を突き抜けて下部構造に肉薄し、搾取の自由を告発している。ここでは平等の旗幟が高く掲げられているのであるが、この点において、ワーズワースとの違いは明らかである。シェリーが後の社会主義者たちのなかで広く読まれた<sup>52</sup>という事実も肯げるところである(シェリーは晩年には内向し、「内なる神秘(the mystery within)」<sup>53</sup>にも目を向けるようになる。このことも見落としてはならないであろう)。いずれにせよ、新しい社会を希求しながらも、階級としての労働者が未だ十分に登場していないなかで、なおその上に現存する社会の社会科学的分析を欠いているかぎり、その新しい社会は“ユートピア”とならざるをえなかったのである。だが、そのラディカルなヒューマニズムニズムは、資本主義成熟期のマルクスとエンゲルスによって引き継がれ、鏝なおされることになるのである。

(4)

われわれは以上、主題にかかわるゴドウィン  
の思想(ゴドウィニズム)の強い影響を受けながら、二重革命と戦争の時代を生きたふたりの詩人——ワーズワースとシェリー——を取り上げ、彼らは時代とどのように対峙したか、また、彼らはいかなる言説を吐露したかということを見てきた。この時代においては、資本主義はまだ成熟しておらず、古い体制と新しい体制とが闘ぎあっていた。その故にこそ、ロマン主義が大きな思潮となるのであるが、なかでも彼らは

<sup>51</sup> P.B. Shelley, “Song to the Men of England”, in *Shelley: Poetical Works, op.cit.*, pp. 572-573. 上田和夫訳「イングランドの人々へ」『シェリー詩集』新潮文庫(改版), 2007, 83-86ページ。

<sup>52</sup> F. エンゲルスからK. マルクス宛の手紙(1845.2.25)のなかで、労働者の集会において、「シェリーの数編」が朗読されたとする記述がある(『マルクス・エンゲルス全集』[以下、『全集』と略す]大月書店版, 第27巻, 20ページ)。また、エンゲルスはシェリーの作品を翻訳している(『全集』第41巻, 473ページ参照)。

<sup>53</sup> P.B. Shelley, “The Triumph of Life” Line 213. in *Shelley: Poetical Works, op.cit.*, p. 512. 上田訳『シェリー詩集』前出, 246ページ。

ふたつの典型（異なる典型）として、「時代の精神」を体現した詩人であり、思想家であった。シェリーが『詩の擁護』の結びとして叙述している次の一節は、このふたりの詩人によく妥当するといえよう。シェリーはのべる。「かれら[現代の作家たち]の言葉の中に燃える電撃的な活力に驚かざるをえない。かれらは、包容力のある、すべてを透視する精神をもって、人間の円周を測り、その奥行きをさぐる。……それは、かれらの精神というよりはむしろ時代の精神 (the spirit of the age) だからである。詩人は、……未来が現在のうえに投げかける巨大な影を映す鏡である。……動かされる力でなく、動かす力である。詩人は世界の非公認の立法者 (the unacknowledged legislators of the world) である。<sup>54</sup>（下線は引用者）

「非公認の立法者」については議論のあるところであるが、これはシェリー独自の詩人論（ないし詩論）に立脚しているのである。シェリーは「精神の働き (mental action)」を理性と想像力 (imagination) とに分けるが、この想像力を担う者こそ詩人にほかならないのである。この点に関する立論を『詩の擁護』における叙述に即してみると、次のようである。

ここにいう想像力については、例えば、次のように引証されている。「アダムに課せられた呪いを軽減すべき発見 [機械の発明] が、かえってそれを加重することになったのは、他のいかなる原因によって生じたものであろうか」と問い、それは「詩的能力」「(想像的能力)」を欠いたからであると断じている<sup>55</sup>。これを別の視点からみれば、次のようである。科学などの個

別の分野の活動は、個々の利害関係などととられて、広い視野を持ちえないのであるが、これに対して詩人は、先に引用しておいたように、「現在のなかに未来をながめ」「永遠なるもの、無限なるもの、全一なるものに与る」ということである。端的にいえば、詩人は「想像力」を働かせることによって総括者となり、統括者となることができるということである（「世界の非公認の立法者」）。したがって、詩人は「予言者」ともなりうる存在である。上の一文のなかにシェリーの自信と自負心が透けてみえるのも、こうした立論にもとづいているからであろう。もちろん、ここでシェリーの立論における社会的科学的分析の欠如を指摘することは容易ではあるが、これはまた別の問題である。

他方、マルサスの思想もまたパークらのそれとともに、「時代の精神」を体現したものであることは、いうまでもないことである。冒頭においてふれた、マルサスと同時代の人であるハズリットはのべる。「一言にしていけば、彼[マルサス]は、……詭弁家及び党派的著作家としての性格のうちに、哲学者および人類の友人としての性格……を見失ってしまったのだ。マルサス氏が出現した時期は、自由と人道主義とに対する解毒薬、死にもの狂いの隷従の汚泥と腐肉とを以ってする、新哲学に対する応答、に満ちていた。そしてわれわれは『人口論』を、……有毒な成分の一つと考えるわけにはいかない。」<sup>56</sup>

ここでは、「詭弁家及び党派的著作家としての性格」という裁断、およびマルサス人口論の有毒性という指摘の当否については措かざるを

<sup>54</sup> P.B. Shelley, "A Defence of Poetry", op.cit., p. 140. 上田訳, 302-303ページ。

<sup>55</sup> Ibid., p. 134. 上田訳, 292ページ。

<sup>56</sup> W. Hazlitt, *The Spirit of the Age*, op.cit., p.31. 神吉訳, 36ページ。



えない——次節以下の論述が一つの回答となろう——が、われわれは筆をすすめるにあたり、「時代の精神」を一方の極において体現するマルサスについての素描として、ここに同時代人の一文を引証するのも無駄ではなからう。

さらに、マルサスやハズリットと同時代人であるシェリーが、マルサスについて次のようにのべているのもまた、興味深い。「私の立場としては、ペリーやマルサスと共に天国に行くぐらいなら、プラトンやベーコンと共に地獄に墮ちるほうがいいと思っている。」<sup>57</sup> プラトン主義者シェリーのかかる言説が正鵠を射ているか否かについては、次節以下のゴドウィン・マルサス論争を吟味するなかで明らかとなろう。

---

<sup>57</sup> *Prometheus Unbound (Preface)*, *op.cit.*, p.207. 石川訳, 19ページ。